1972年6月15日発行
共産主義者同盟（RG）
第4号　100円　発行人　野村　忠

赤報

スターリン主義打倒、反スタマルクス主義止揚、革命的マルクス・レーニン主義復権の旗を更に高く掲げ、国際非合法党を建設せよ！

連合赤軍の党的破産と国際非合法党建設の道（上）

序　文

われわれは、すでに昨年11月に赤報1号の紙上で連合赤軍の路線に対する批判を明らかにし、さらに、本年2月、あの銃撃戦の以前に、かつての党内連合赤軍＝神奈川左派に対する批判の中で、赤軍派と日共革命左派の路線に対する批判を明らかにしておいた。（省にこれらのすべてを、順を追って「赤報」2号、もっとも印刷体制の事情で、発行されたのは、3月25日であったが）

さらに、銃撃戦・粛清事件に関しては、3月16日付で特別号をガリ刷りで発行し、その内容は、若干の補足とともに「赤報」3号に収録されている。われわれは、読者がこれらの批判を読まれることを要請する。

2ケ月後の今日、銃撃戦―粛清事件をいかに総括するかをめぐって種々の議論がふっとうしている。勝利したブルジョア階級は当初の宣伝戦から、せんめつ戦へと移行し、いわゆる「過激派」の支持基盤をどこまで実質的に解体しうるかが最大の眼目である。だが、このことは不可能である。

日共は、連合赤軍と武装教条主義とを結合させ、人民戦争路線の建設を宣伝するのならず、日共独自の「ローラー作戦」を展開し、ブルジョア階級のよき協力者となっている。

革マル、日向、青解等々は、連合赤軍の党的破産を、日共と同様に、革命戦争の破産ととらえ、自己の合法主義的組織と運動の合理化を試みている。一方、中核派は「自己の内なる連合赤軍」に思いをいたし、沈黙をつづけている。

さらに又、いわゆる「蜂起・戦争派」なる部分、昨年4・28清水谷公園に結集したグループは、3つの方向に分岐している。ひとつはわれわれの路線であり、ふたつは、佐野茂樹氏に代表される武装協争の経験者の「重い口」を開かせている。もちろん、安東仁兵衛や、また、一部の毛派の指導者のように、「過激派」は「泳がされている」と信じ、結局は、日共革命左派の総括を共同作業として進めるという見解で一致している。

日共革命左派は、党組織に対する態度に関しては、赤軍派よりもすぐれたものをもっている。彼らが今日明らかにしている「統一赤軍反対」をめぐっての党内闘争と指導部の獄中指導部に対する「ペテン」は、この闘争を党的に総括する場合の唯一の基準となるであろう。ただ、彼らが、「反米愛国」路線を強調し、その復権による党の再建を主張するのを見る時われわれは、「反米愛国」路線の破産として問題とらえるべきではないかと考えている。これについては、次回にくわしくふれるであろう。

ところで今回の事件は、かつての日共50年分裂と、所感派指導の武装闘争の経験者の「重い口」を開かせている。もちろん、安東仁兵衛や、また、一部の毛派の指導者のように、「過激派」は「泳がされている」と信じ、結局は、日共革命左派の総括を共同作業として進めるという見解で一致している。

革マル、日向、青解等々は、連合赤軍の党的破産を、日共と同様に、革命戦争の破産ととらえ、自己の合法主義的組織と運動の合理化を試みている。一方、中核派は「自己の内なる連合赤軍」に思いをいたし、沈黙をつづけている。

さらに又、いわゆる「蜂起・戦争派」なる部分、昨年4・28清水谷公園に結集したグループは、3つの方向に分岐している。ひとつはわれわれの路線であり、ふたつは、佐野茂樹氏に代表される武装協

〈一面より続く〉

織的、軍事的活動の全滑結として統撃戦と粛清があったことを、断固として認めることである。革命的プロレタリアートは決して、粛清を避けることの出来たであろう、あれこれの条件（日く、三種の軍隊、日く、人民内部の矛盾の処理といった）について諸君達の意見を聞くことを要求してはいない。諸君達が今、いろいろの思いつきを述べる以上に、革命的プロレタリアートはこれらの条件に関しては熟知しているだろう。そして、諸君達の意見に従えば、そもそもの時点で統撃戦を闘うことは不可能であったであろう、あの統撃戦が、粛清を必然的代償としたこと、それ故に、事態は何よりも運命赤軍の党的敗北であること、すなわち自らの党建設そのものを総括することが必要なのである。にもかかわらず、粛清を避ける条件をあれこれ考えることは、結局は党的敗北をプロレタリアートの前に隠蔽し、口先では統撃戦を支持しつつも、統撃戦を闘なかったであろう方策をあれこれ主張することによって結局は革命赤軍の闘争に反対し捕われた人々を敵に売り渡すことになってしまうのである。

(b)赤軍派の党的解体と思想的乗り移り

党的敗北を公然と認めることと党的解体とは同じことを意味するものではない。前者は、自らの過去の理論と実践に責任をもった立場であり、後者は、混乱、乗り移り、そして転向を意味する。赤軍派の諸君の従来からの根本的欠陥は、この党的敗北を公然と認めるかわりに、過去の実践の失敗をあれこれの戦術的、組織的、技術的問題に求め、その結果として不断に党的解体に陥っていたことである。７・６然り、大菩薩然り、H・J然り、そして今回の闘争も。

党的敗北を認めない結果、逆に個々の闘争をただ単に敗北と失敗として総括するやりかたが横行する。だが実際には国際根拠地をめざしたH・Jを頂点として、今回の統撃戦及び個々の闘争においては、彼らは技術的には失敗することなく、断固として闘ったのである。革命的プロレタリアートは決して、粛清の戦術的目的を多く達成してくその戦術的目的を多く達成してくれた、三種の軍隊

〈二面より続く〉

政治運動は、手段としてこの目的に従属すべきこと」

「土地の貴族と資本の貴族は、つねにその政治的特権を、彼らの経済的独占を擁護し永続化せ労働者を隷属させるために利用しているので、政治権力の獲得はプロレタリアートの偉大な義務となっている」

要するに、労働者階級の経済的解放が目的であって、政治権力の奪取は義務であること、これがマルクス主義の階級闘争に対する原則である。ところが、八木君は、この両者を目的として、同等に取り扱うことによって、資本主義批判と赤軍派の直感とを折衷したのである。

(c) マルクス主義の原則復権の今日的意義

思想における折衷主義を克服することなしには、中央集権的組織の建設は空語である。そして又、階級闘争に対するマルクス主義の原則に首尾一貫して立脚することによってのみ、組織に対する中央集権主義の思想を具体化することが出来る。

労働者階級の経済的解放が目的であって、政治権力の奪取はプロレタリアートの義務であること、この思想に導かれることによってはじめて、党組織の性格、目的、任務を明らかにすることが出来る。プルジョア国家の粉砕とプロレタリア独裁の樹立の問題は、日本階級闘争において、革命的プロレタリアートが、民族民主の変革命戦、今日では社会帝国主義に転落した日共から、たもとを分ち、一個の政治潮流として登場する過程においては、決定的な党派性なしたのである。革命論と非合法党の時代においては、このいわゆる、暴力革命の立場のみでは決定的に不充分である。

事実、軍事組織を建設した党派は全て、たとえば、来るべき共産主義社会をめぐって、党と共産主義社会の関係とか、戦略と究極目標との関係とか、軍人の共産主義化といった問題が論争して煮つまったのであって、この論争を階級闘争に対するマルクス主義の原則的立場から解決することが迫られたのであった。

かつて高原君が強調し、われわれと赤軍派との共通した認識であった「国際主義と組織された暴力」すなわち、世界単一のプロ独と革命の軍隊の建設、われわれの綱領問題と組織問題の中心点と考え、世界単一プロ独を資本主義批判から裏づけ、更に世界プロ独をスターブハ綱領の連邦主義に対するマルクス主義の階級闘争の基準として、これから旧来の党と軍に対する考え方を転換し、政治局＝軍事委員会R＝政治軍隊としてその組織的性格を決定し、同盟内八派・蜂火派と同盟内連合赤軍派（神奈川左派）の脱走を折衝しつつも連合赤軍の権力問題における連邦主義、党組織における分権主義を思想を組織建設に具体化し共産同（RG）を結成して、この到達した組織的地平から、綱領問題を再度とらえかえし、階級闘争に対するマルクス主義の原則を復権し、革命戦争の戦術に対する、またプロレタリアートの新しく確立された非合法党への組織化、そして革命戦争への動員に対する確固とした基準を獲得した。

一方、赤軍派は、例の直感を唯一のよりどころとした結果、世界プロ独は言葉のみになり、それ故、党と軍隊はプルジョア国家の粉砕を唯一の目的にした、一国性の枠内に細領問題を限定し、連邦主義に解体され、党組織と軍は分権主義に陥り、日共革命左派との連合へと走り、連合赤軍を結成したのである。われわれは、すでに昨年11月に、「連合赤軍の結成は、二派の諸君の党的危機の表現でもあり、この危機を真に解決することにつながらない危険をひめているからである。すなわち連合赤軍の最大の問題は、その連合という点にあると我々は考えている。連合革命は統一赤軍、新党結成という考え方の中には、権力問題における連合戦術、一党独裁の否定＝複数政党論が存在している」と判断せざるをえないからである」（「赤報」1号）と、この点を指摘し、更に、銃撃前の前に、連合赤軍に対する原則上の批判はすべての点にわたってなされている。（「赤報」2号参照）我々が主張している階級闘争に対するマルクス主義の原則の復権は、単なる組織問題ではなく、革命戦争を戦う組織の実践的な理論的課題であって、歯清を曇露されてはじめて思いついたものではないのである。

(d) 八派に立ち帰り、革命戦争をめぐる党派闘争に無縁な八木沢一派

わが同盟から脱走した八木沢一派は、共産同全国委（蜂火）を名乗り、同盟内八派から、八派の現実的基盤に立ち帰ったが、今回の事態を、「世界革命運動史上最大の汚点を残す事件」だと騒き立て「政治的党的結集を喪失した無党派闘争団への転落の懸念」（「蜂火」2・73号）であると断じている。奇妙なことに、彼等は、日共や革マル、八派を党派と認めながら赤軍派、「日共革命左派、連合赤軍それにわれわれ共産同、（RG）に関しては、無党派だというのである？いわゆる、革命戦争派の内部において「ますます熾烈な党派闘争が要求されるという原則」（同上）を主張しつつも、分派闘争以来半年が過ぎても、わが共RG、赤報に対する全国委の態度が表明されないことを不思議に思っていたのだが、「われわれは、われわれの身の内に、現在の赤軍派を見ることが出来ないだろうか。われわれは、赤軍派と同じ様に同盟の改組に失敗し、赤報派を生み出し分派した。われわれも胎より、統一赤軍を生み出したのである」（「蜂火」№2・2）という主張と、今回の主張を見る時、全国委員会はわれわれを無党派とみておらの経済、という彼らの態度を知ることが出来る。

だがこのことは、彼等にとっては、われわれの党派性が彼等の実践の段階にまで、理解する能力がないことを自己表明するものに過ぎない。われわれが、二派の諸君と党派闘争を内実をもって展開することが出来たのは、革命戦争の内容を把握しようとする実践的意志があったからである。だから彼らの歴清に対する態度とは、一方では、日共・革マル・八派の批判に対して反論し、主観的には「一切の意気消喪に抗し、革命戦争をめぐる党派闘争の実、革命戦争をめぐる党派闘争の内容を把握しようとするものである。このように把握すれば、赤軍派の社会主義革命論争と日共革命左派の民族民主革命論を、「民族解放・民主主義・社会主義革命路線」として統合できるというわけである。だが、資本主義のもとでの民族民主革命論争は、たとえプロレタリアートが行なおうと、それは思想的にブルジョア民主々義国家を前提とした上でなされる駅であって、プロレタリアートは、自らの共産主義革命のための闘争に従属するものとして、それを指導しなければならないのであって、民主々義闘争を権力奪取の闘争と取りちがえることは、決定的に誤りである。

花園君にとってのプロレタリアートとは、民主々義闘争か闘わないかの如く見えるが、彼が見ているのは実は、小ブルジョアである。プロレタリアートは、民主々義闘争に決着するだけでなく、自らの経済的解放を勝ち取るために革命戦争に参加し、プルジョア国家を粉砕するだろう。プロレタリアートが単に具体的成果を約束する闘争に立つばかりでなく、自らの経済的解放という一抽象的」な課題において最も根本的に闘うこと、そして、そのために強固な党組織に自らを結集することによって、全ての政治闘争を、この目的を実現する手段として使用することを学ぶであろうこと、このことを花園君はすっかり見落している。

(c) プロレタリア人民に対するロマン主義と社帝に対する党派闘争の敗北

花園君は、空想家の多い赤軍派の中でも、リアルな感覚をもちあわせている。それ故、赤軍派の戦術を冷静に分析し民主々義革命の課題において、労働者階級の組織、新しい社会体制を築くことと、革命的な党の建設とが、決して別々のものではなく、一つの過程であることを、はっきりと認識していたのである。

この様に、階級闘争の歴史的経験が、花園君の二段階論の誤りを教えてくれる。この二段階論の戦術的・政治的誤りは、もっと深刻である。政治闘争を社会経済革命と切りはなし、前者をプロレタリア民主々義、後者を社会主義と把える結果、権力奪取はプロレタリアが指導する民主々義闘争の任務としてしまうことである。だが、原則に忠実であり、二派の統合という良き意図の持った花園君の誤りは、第一にその原則そのものが不充分であること、第二にその結果、政治革命と社会経済革命とを二段階に分離し、第三に民主々義闘争をプロレタリア民主々義革命の延長線上に位置づけることによって、プロレタリアの民主々義闘争の独自性を喪失させてしまうことである。

赤軍派と日共革命左派の一致点が一体どこにあったのかいえばそれはいうまでもなく戦術上のそれであった。そして、この戦術上の一致を論理的に導いたんこそ、花園君であった。花園君は、日共革命左派の民族民主革命という戦術と、赤軍派の社会主義革命という戦術を、民主々義革命のふたつの内容（プルジョア民主々義革命とプロレタリア民主々義革命）を提起することによって、「民族解放・民主主義・社会主義革命」の戦術へと統合したのである。この立場から花園君は、赤軍派の帝国主義的経済支配を批判し、一方日共革命左派の毛思想教条主義を批判し、両派の統合の推進力となったのであった。

花園君の根本思想は、次の内容にまとめることができる。「新民主主義革命（プロレタリア民主々義革命）とは、社会主義革命以外の何物でもない。但し、社会主義革命は政治革命を達成してはじめてその社会経済革命の道程をふみ出すのであり、この政治革命と社会経済革命のふたつの段階が混同してはならない。政治革命の核心は国家権力の奪取にあり、プロレタリア民主主義独裁の実現にあるからである。従ってわれわれは、プロレタリア民主々義独裁権力の達成までの期間を、社会主義革命の第一段階として位置づけ民主々義革命と規定するべきである。」（「序章」№6P24）つまり、社会主義革命を政治革命と社会経済革命の2つの段階に分離し、前者を民主々義革命と規定することによって、後者を社会主義革命と規定することによって、プロレタリア民主々義革命の樹立の為の闘いについた過ごない。赤軍派は何もくとも赤派の諸君がそう見ていらない。この点に関しては、われわれは花園君とは逆に、日本プロレタリアートの英雄的武装闘争もその綱領上、戦術上の誤りによって、敗北せざるをえなかったと考えており、それ故、51年綱領の復権には反対である。

そもそも51年綱領の内容は、日本共産党の当面の要求を記したものであり、その根本内容を、当然にもコミンテルン綱領の基礎としている。だから、花園君が51年綱領の革命的原則「という場合、コミンテルン綱領に対しても同じ立場を採ること意味する。51年綱領の復権は、コミンテルン綱領の復権を意味する。

この花園君の主張は、それ故第一次ブンドへから第二次ブンドへと引き継がれて来た反スターリン主義の清算である。われわれは、もちろん、第一次ブンドに始まる日本の反スターリン主義運動が、全面的に正しかったということを主張するつもりはない。だが、反スターリン主義運動の登場が、日本におけるマルクス・レーニン主義の復権に寄与したことは事実である。それは、プロレタリア国際主義の復権であり、主要に第二次ブンドによって明確にされた世界同時革命・世界プロ独の問題である。花園君はこの問題を一切無視している。彼は、塩見君の過渡期世界論について語りながら、世界同時革命についても語ろうとしない。このことは、51年綱領及びコミンテルン綱領の復権が、世界同時革命・世界プロ独の立場とは相いれないものであることを示している。

われわれは、資本主義批判からいわゆる革命の道筋論を批判し、世界同時革命からスローガンを発展させて、世界単一のプロ独を基準としたコミンテルン綱領の連邦制の批判による国際的党派闘争として問題を煮つめて来た。実にコミンテルン綱領の社会主義連邦制の定式化こそ、今日の社会帝国主義者のよりどころとなっており、そして、一方、革命的な共産主義者と世界の労働者階級・人民の闘争の現実によって、日々打ち破られているものである。

〈四面へ続く〉

第四章　赤軍派の戦術論批判

(a) 連合赤軍結成の指導理論としての花園理論

われわれは、階級闘争に対するマルクス主義の原則の復権を強調して来た。その理由は、他ならぬ「政治的党的結集を喪失した無党派闘争団への転落の懸念」（「蜂火」2・73号）であると断じている。奇妙なことに、彼等は、日共や革マル、八派を党派と認めながら赤軍派、「日共革命左派、連合赤軍それにわれわれ共産同、（RG）に関しては、無党派だというのである？いわゆる、革命戦争派の内部において「ますます熾烈な党派闘争が要求されるという原則」（同上）を主張しつつも、分派闘争以来半年が過ぎても、わが共RG、赤報に対する全国委の態度が表明されないことを不思議に思っていたのだが、「われわれは、われわれの身の内に、現在の赤軍派を見ることが出来ないだろうか。われわれは、赤軍派と同じ様に同盟の改組に失敗し、赤報派を生み出し分派した。われわれも胎より、統一赤軍を生み出したのである」（「蜂火」№2・2）という主張と、今回の主張を見る時、全国委員会はわれわれを無党派とみておらの経済、という彼らの態度を知ることが出来る。

だがこのことは、彼等にとっては、われわれの党派性が彼等の実践の段階にまで、理解する能力がないことを自己表明するものに過ぎない。われわれが、二派の諸君と党派闘争を内実をもって展開することが出来たのは、革命戦争の内容を把握しようとする実践的意志があったからである。だから彼らの歴清に対する態度とは、一方では、日共・革マル・八派の批判に対して反論し、主観的には「一切の意気消喪に抗し、革命戦争をめぐる党派闘争の実、革命戦争をめぐる党派闘争の内容を把握しようとするものである。このように把握すれば、赤軍派の社会主義革命論争と日共革命左派の民族民主革命論を、「民族解放・民主主義・社会主義革命路線」として統合できるというわけである。だが、資本主義のもとでの民族民主革命論争は、たとえプロレタリアートが行なおうと、それは思想的にブルジョア民主々義国家を前提とした上でなされる駅であって、プロレタリアートは、自らの共産主義革命のための闘争に従属するものとして、それを指導しなければならないのであって、民主々義闘争を権力奪取の闘争と取りちがえることは、決定的に誤りである。

花園君にとってのプロレタリアートとは、民主々義闘争か闘わないかの如く見えるが、彼が見ているのは実は、小ブルジョアである。プロレタリアートは、民主々義闘争に決着するだけでなく、自らの経済的解放を勝ち取るために革命戦争に参加し、プルジョア国家を粉砕するだろう。プロレタリアートが単に具体的成果を約束する闘争に立つばかりでなく、自らの経済的解放という一抽象的」な課題において最も根本的に闘うこと、そして、そのために強固な党組織に自らを結集することによって、全ての政治闘争を、この目的を実現する手段として使用することを学ぶであろうこと、このことを花園君はすっかり見落している。

(b) 花園「民族・解放・民主主義・社会主義」革命論の誤謬

花園君が力説したマルクス主義の原則とは、「革命の暴力で国家権力を奪取するという学説」とプロレタリア民主々義革命を通じて、この暴力革命の場を抜きにしたマルクス主義は、全て偽りである。だが、マルクス主義は、暴力革命を主張するのみならず、何のための暴力革命かを明確に主張しなければならない。すなわち、労働者階級の経済的解放という目的のために、プロレタリアート国家権力を奪取しなければならないのである。だから花園君の様に、政治革命と社会経済革命とを二段階に分けるのは全く誤りである。ロシアにおいても、すでに権力奪取以前の二重権力状態において、資本家の収奪すなわち社会革命は進行していたのであり、また長期の戦闘期間において、プロレタリア民主々義独裁権力の達成までの期間、社会主義革命の第一段階として位置づけ民主々義革命と規定するべきである。」（「序章」№6P24）つまり、社会主義革命を政治革命と社会経済革命の2つの段階に分離し、前者を民主々義革命と規定することによって、後者を社会主義革命と規定することによって、プロレタリア民主々義革命の樹立の為の闘いについた過ごない。赤軍派は何もくとも赤派の諸君がそう見ていらない。この点に関しては、われわれは花園君とは逆に、日本プロレタリアートの英雄的武装闘争もその綱領上、戦術上の誤りによって、敗北せざるをえなかったと考えており、それ故、51年綱領の復権には反対である。

そもそも51年綱領の内容は、日本共産党の当面の要求を記したものであり、その根本内容を、当然にもコミンテルン綱領の基礎としている。だから、花園君が51年綱領の革命的原則「という場合、コミンテルン綱領に対しても同じ立場を採ること意味する。51年綱領の復権は、コミンテルン綱領の復権を意味する。

この花園君の主張は、それ故第一次ブンドへから第二次ブンドへと引き継がれて来た反スターリン主義の清算である。われわれは、もちろん、第一次ブンドに始まる日本の反スターリン主義運動が、全面的に正しかったということを主張するつもりはない。だが、反スターリン主義運動の登場が、日本におけるマルクス・レーニン主義の復権に寄与したことは事実である。それは、プロレタリア国際主義の復権であり、主要に第二次ブンドによって明確にされた世界同時革命・世界プロ独の問題である。花園君はこの問題を一切無視している。彼は、塩見君の過渡期世界論について語りながら、世界同時革命についても語ろうとしない。このことは、51年綱領及びコミンテルン綱領の復権が、世界同時革命・世界プロ独の立場とは相いれないものであることを示している。

われわれは、資本主義批判からいわゆる革命の道筋論を批判し、世界同時革命からスローガンを発展させて、世界単一のプロ独を基準としたコミンテルン綱領の連邦制の批判による国際的党派闘争として問題を煮つめて来た。実にコミンテルン綱領の社会主義連邦制の定式化こそ、今日の社会帝国主義者のよりどころとなっており、そして、一方、革命的な共産主義者と世界の労働者階級・人民の闘争の現実によって、日々打ち破られているものである。

(a) 花園君の世界プロ独の清算とコミンテルン綱領への屈服

花園君は、日共と第一次ブンドとの党派闘争を、次の様に総括している。「一九五八年、ブンドが日共（代々木）から脱別した時、六全協路線の現代修正主義という綱領を見抜けず、従って、51年綱領の革命的原則を堅持出来ず、現代修正主義に対する自然発生的闘争の実践として行なわれた51・52年の武装闘争の具体的分析の中からその正しさが証明されなければならない。」（「序章」6号P9）そして、その結果として「われわれは、この51年綱領の革命的原則を堅持出来ず、現代修正主義に対する自然発生的闘争の実践として行なわれた51・52年の武装闘争の具体的分析の中からその正しさが証明されなければならない。」（「序章」6号P9）そして、その結果として「われわれは、この51年綱領の革命的原則を堅持出来ず、現代修正主義に対する自然発生的闘争の実践として行なわれた51・52年の武装闘争の具体的分析の中からその正しさが証明されなければならない。」（「序章」6号P9）

花園君は、日共と第一次ブンドとの党派闘争を、次の様に総括している。「一九五八年、ブンドが日共（代々木）から脱別した時、六全協路線の現代修正主義という綱領を見抜けず、従って、51年綱領の革命的原則を堅持出来ず、現代修正主義に対する自然発生的闘争の実践として行なわれた51・52年の武装闘争の具体的分析の中からその正しさが証明されなければならない。」（「序章」6号P9）そして、その結果として「われわれは、この51年綱領の革命的原則を堅持出来ず、現代修正主義に対する自然発生的闘争の実践として行なわれた51・52年の武装闘争の具体的分析の中からその正しさが証明されなければならない。」（「序章」6号P9）

花園君は、空想家の多い赤軍派の中でも、リアルな感覚をもちあわせている。それ故、赤軍派の戦術を冷静に分析し民主々義革命の課題において、労働者階級の組織、新しい社会体制を築くことと、革命的な党の建設とが、決して別々のものではなく、一つの過程であることを、はっきりと認識していたのである。

この様に、階級闘争の歴史的経験が、花園君の二段階論の誤りを教えてくれる。この二段階論の戦術的・政治的誤りは、もっと深刻である。政治闘争を社会経済革命と切りはなし、前者をプロレタリア民主々義、後者を社会主義と把える結果、権力奪取はプロレタリアが指導する民主々義闘争の任務としてしまうことである。だが、原則に忠実であり、二派の統合という良き意図の持った花園君の誤りは、第一にその原則そのものが不充分であること、第二にその結果、政治革命と社会経済革命とを二段階に分離し、第三に民主々義闘争をプロレタリア民主々義革命の延長線上に位置づけることによって、プロレタリアの民主々義闘争の独自性を喪失させてしまうことである。

赤軍派と日共革命左派の一致点が一体どこにあったのかいえばそれはいうまでもなく戦術上のそれであった。そして、この戦術上の一致を論理的に導いたんこそ、花園君であった。花園君は、日共革命左派の民族民主革命という戦術と、赤軍派の社会主義革命という戦術を、民主々義革命のふたつの内容（プルジョア民主々義革命とプロレタリア民主々義革命）を提起することによって、「民族解放・民主主義・社会主義革命」の戦術へと統合したのである。この立場から花園君は、赤軍派の帝国主義的経済支配を批判し、一方日共革命左派の毛思想教条主義を批判し、両派の統合の推進力となったのであった。

花園君の根本思想は、次の内容にまとめることができる。「新民主主義革命（プロレタリア民主々義革命）とは、社会主義革命以外の何物でもない。但し、社会主義革命は政治革命を達成してはじめてその社会経済革命の道程をふみ出すのであり、この政治革命と社会経済革命のふたつの段階が混同してはならない。政治革命の核心は国家権力の奪取にあり、プロレタリア民主主義独裁の実現にあるからである。従ってわれわれは、プロレタリア民主々義独裁権力の達成までの期間を、社会主義革命の第一段階として位置づけ民主々義革命と規定するべきである。」（「序章」№6P24）つまり、社会主義革命を政治革命と社会経済革命の2つの段階に分離し、前者を民主々義革命と規定することによって、後者を社会主義革命と規定することによって、プロレタリア民主々義革命の樹立の為の闘いについた過ごない。赤軍派は何もくとも赤派の諸君がそう見ていらない。この点に関しては、われわれは花園君とは逆に、日本プロレタリアートの英雄的武装闘争もその綱領上、戦術上の誤りによって、敗北せざるをえなかったと考えており、それ故、51年綱領の復権には反対である。

そもそも51年綱領の内容は、日本共産党の当面の要求を記したものであり、その根本内容を、当然にもコミンテルン綱領の基礎としている。だから、花園君が51年綱領の革命的原則「という場合、コミンテルン綱領に対しても同じ立場を採ること意味する。51年綱領の復権は、コミンテルン綱領の復権を意味する。

この花園君の主張は、それ故第一次ブンドへから第二次ブンドへと引き継がれて来た反スターリン主義の清算である。われわれは、もちろん、第一次ブンドに始まる日本の反スターリン主義運動が、全面的に正しかったということを主張するつもりはない。だが、反スターリン主義運動の登場が、日本におけるマルクス・レーニン主義の復権に寄与したことは事実である。それは、プロレタリア国際主義の復権であり、主要に第二次ブンドによって明確にされた世界同時革命・世界プロ独の問題である。花園君はこの問題を一切無視している。彼は、塩見君の過渡期世界論について語りながら、世界同時革命についても語ろうとしない。このことは、51年綱領及びコミンテルン綱領の復権が、世界同時革命・世界プロ独の立場とは相いれないものであることを示している。

われわれは、資本主義批判からいわゆる革命の道筋論を批判し、世界同時革命からスローガンを発展させて、世界単一のプロ独を基準としたコミンテルン綱領の連邦制の批判による国際的党派闘争として問題を煮つめて来た。実にコミンテルン綱領の社会主義連邦制の定式化こそ、今日の社会帝国主義者のよりどころとなっており、そして、一方、革命的な共産主義者と世界の労働者階級・人民の闘争の現実によって、日々打ち破られているものである。

〈四面へ続く〉

〈三面より続く〉

花園君は、「革命の問題は国家権力の問題」だといっているが、しかし彼は、ブルジョア国家を暴力的に粉砕しなければならないと確認するのみであって、樹立すべきプロレタリア権力に関しては、何も語ろうとしない。このことは彼の世界単一のプロ独の祝福と同じ内容、同じ思想である。社会帝国主義者は、樹立すべきプロレタリア権力は一国ごとになされるであろうから、平和共存を主張し、それ故、平和移行が可能であると主張する。一方、51年綱領や花園君の立場は、革命権力の内容には、ふれないままで、ただ暴力を対置するのみである。社会帝国主義者の立場は、ただ方法において日和見主義者などのではない。革命権力の内容自体が問題なのである。

一労働の解放は、局地的な問題でも、一国的な問題でもなく、近代社会の存在するあらゆる国々を包括し、その解決はもっとも先進的な諸国の実践的および理論的協力によらなければならない社会問題であること」（第インターナショナル一般規約）プロ独権力は、労働の経済的解放のための手段である以上、その内容はこの原則に従わなければならない。この原則を満たす政治形態は世界単一のプロレタリア独裁しかありえない。そして、この世界単一のプロレタリア独裁は帝国主義と社会帝国主義に対する世界革命戦争の勝利によって樹立されなければならないプロレタリア革命の目的とプロレタリア独裁の内容を欠落させることによって、花園君はコミンテルン綱領に屈服し、その結果、日共＝社会帝国主義者との党派闘争をも、せいぜい戦術左翼としてしか自己を表現しない。この日共＝社会帝国主義者に対する戦術左翼的立場は、今回の統一戦線＝連合の思想的基礎をなしている。

(b)プロレタリアの民主主義闘争とプロレタリア民主主義の混同について

51年綱領にもとづく武装闘争の戦術は次のように語られている。

「……従って、敵が自分の力を強めるために、諸政策を行え行うほど、それが国民の利益に反し、国民のあらゆる形の闘いを呼び起し、これを激しくして、国民から孤立するに反し、味方の行動は国民の利益の上に立っており、活動することによって一層の支持と援助を受けることが出来るのである。」（「われわれは武装の準備と行動を開始しなければならない」）すなわち、敵、プロレタリア民主主義を国家形態のことをいっているのである。第二に、だから、プロレタリア民主主義の民主主義的要求とは、何の関係もないのである。なぜなら、資本主義のもとでのプロレタリアートの民主主義的要求には、ブルジョアジーに対するプロレタリアートの独裁のことである。第三に、資本主義の下でのプロレタリアートの民主主義的要求が、社会主義的改造の政治的反映であるとする花園理論は、資本主義に於るプロレタリアートの民主主義の要求とプロ独下のプロレタリアートの民主主義の要求とを混同しているところの金で飾った見解である。

資本主義社会におけるプロレタリアートの経済的解放のための要求は、第2インターの綱領（ブルジョアジーの収奪とか、賃労働の廃止といったスローガンは、すべて共産主義的要求）である。ただ、私有財産制の廃止とか、プロレタリアートの民主主義的要求ではありえない。赤軍派の規約破産は、このプロレタリアートの民主主義的要求を無視しているところに、共産主義的要求の如く考え、民主々義的要求との戦術的区別の欠如があるのではなく、共産主義的要求に基礎をおかねばならないのであって、プロレタリアートは、自らを民主主義的要求で覚組織と結合した時、はじめて共産主義的要求のためにあらゆる闘争を利用することを学ぶであろう。

(c)マルクス・レーニン主義の復権と戦術問題

プロレタリアートの共産主義的要求とは、労働者階級の経済的解放であり、そのためにプロレタリアートは世界プロ独をかちとることを義務としている。そして、この世界プロ独は、帝国主義＝社会帝国主義に対する世界革命戦争によってしか樹立することは出来ない。プロレタリアートは民主々義闘争を、党と軍の組織へと利用することを学び取り、世界革命戦争に勝利し、世界プロ独を樹立し、共産主義社会を実現しなくてはならない。

日共＝社会帝国主義者は、民族民主統一戦線の下に今日の諸要求を数派を形成し、民主連合政府の樹立し、「独立・民主・平和・中立の日本」を築くことを主張している。この基本路線からは、個々の大衆運動は、憲法の防衛、議会制の防衛、労働者と農民の生活と権利の防衛、平和運動、学問の自由と大学の自治の防衛といったものとして提出され、それは選挙運動のあくまでその枠内に集約されている。

このような日共＝社会帝国主義者に対する反対派として登場したのが、第二次ブンド以降のいわゆる全共闘・反戦に至るまでの反スターリン主義運動であり、それは基本的には、暴力革命の立場から日共の路線を批判したのであるが、それは階級闘争に対するマルクス主義の原則をふまえたものとはいえなかった。反スターリン主義運動が、その成長の中で、武装闘争に結びつき、そこにおいてマルクス主義の原則の復権がせまられたとき、反スターリン主義運動の諸々の立脚点が（黒田寛一から、ロゴ主義的要求に基礎をおくのではなく、共産主義的要求に基礎をおかねばならないのであって、プロレタリアートは、自らを共産主義的要求で覚組織と結合した時、はじめて共産主義的要求のためにあらゆる闘争を利用することを学ぶであろう。

われわれの立場からすれば、日共＝社会帝国主義者の綱領なるものは民主々義革命のための時代遅れな戦術に過ぎず、それはプロレタリアートの経済的解放のための手段として利用されねばならないが、ただ、日共は当面する日本革命を民主々義革命とし、選挙運動と選挙党の拡大をその戦術とするが故に、民主々義的要求が彼らにとっては、綱領としての意味をもっているのである。彼らにとっては、民主々義的要求は革命の目的と主張している。しかしわれわれは、日共と革命の目的を異にしている。われわれが、ブルジョアジーの民主々義に対する優勢と闘うのは、そのことと目的自体が目的なのではなく、プロレタリアートが革命戦争に参加するのを助けるために闘うのである。一方、反スタ諸派は、この民主々義的戦術の延長上に、更に赤軍派は、民主々義的要求を革命戦争の目的として止まってしまっているのである。

2年ぶりの日本人記者との会見でも、自分達は社会主義革命が解っていなかったと語っていたが、そもそも赤軍は、民主々義的要求を革命戦争の目的としていたのであり、社会主義革命の内容上の意志統一は存在しなかったのであって、花園君が大胆に整理したごとく、戦術的には人民戦争派と共通な内容に帰着するのである。（赤軍派が戦術に依拠したのは、ベトナム労働党、朝鮮労働党、PLF、キューバ共産党等）と同じく、つき従うことによって、日本の階級闘争の国際的党派闘争の場となった。われわれは人民戦争派の大衆の大衆から学ぶべきことはすべて学びつつも国際的党派闘争を貫徹し、日本の階級闘争の諸問題を独自に解決することを通して、日本プロレタリアートの国際的責任を受けとめることを宣言する。（一九七二年五月一六日）

× × ×

最後に補足のものに関するわれわれの見解と、さらに、ここで述べて来た内容を、簡単なテーゼにまとめておこう。

歳清に関しては、連合赤軍は、統一戦線を担う党建設に向けた、党内闘争の組織化に失敗したとして、歳清派の立脚点というべき内容をみることによって、このことを確認しよう。

(c)諸派の基本路線

▼革マル派

「プロレタリア革命の目的が何であり、階級の解放を基礎とした人間の人間による解放、この究極目標をプロレタリア革命でいかにつらぬいていくか、即自的なプロレタリアを階級的自覚と共同体結合させていくこと、および党組織における共産主義者の創造と確立」このような問題意識」（解放）

▼革労協

「プロレタリア革命運動とは、現存するプロレタリア社会の中からそれを根本的に越えて行く新たな人間的共同体、国家、彼らの私的利益追求から自己を止揚して行くものである。それは帝国主義の工場制度に対する闘いを根源として、更に消費生活（家庭生活をふくめて）をも含んだ総体の階級的闘いのである」

▼叛旗

「ほんとうの問題は現存の敵も普遍的で、永続的な共同性であり共同体である国家、現存の階級の根拠である国家を止揚するためには幻想（想像力）を立脚点とするプロレタリア革命に対する思想内容に関しては、これらの諸派はプロレタリアートを恐れ日共、革マル、社民に止揚出来ないということである国家市民社会の総体を覆う共同的関係の激つめとその結合で止揚に向うということである」（叛旗）

▼第四インター

「労働力商品化の廃絶」をおろし「帝国解体」を中心スローガンとしてしまった基本路線は

▼八木沢派

「プロレタリア独裁の問題を、もっぱら権力の解体と権力の奪取としてのみ考えるこの様な発想は所詮裏返しの共通のものであった。……党の掲げる最少限綱領、それは階級闘争の条件の形成を目的とすると共に旧社会の言葉で語られたプロ独の内実の一端であるのだが」をもっぱら、権力奪取の手段にすり代えたこの発想からは、最少限綱領だけでなく大衆を組織するための諸要求以外の位置はふられない」（蜂火2号）

× × ×

ここで特徴的なことは、革命戦争に反対している諸派は、たとえば、革マル派が、プロの階級的自覚と、党組織における共産主義者の創造といい、革労協が、新たなる人間共同体と闘いを通して生みだして行くといい、叛旗が、国家の止揚といっているように、無政府主義的立場にしてしまっていることである。

日本共産党、スターリン主義に対して、主体性の確立とか、組織の疎外からの解放とか、労働者階級の自立とかいって批判した彼らは、今日では、階級闘争の現実、党、兵士と人民の交流を通して軍隊に工作する闘争、それが今日のわれわれの"革命的闘争"であるとは言えるとは、現在はその時期ではない。（解放）

▼叛旗

「党、軍、統一戦線を階級的発現の独自性と統合性から押え、綱領、規律、生活倫理においてきたのである」（叛旗）

▼第四インター

「われわれは、未だ銃を手にはしないが、紙と言葉の弾丸を、それも大量の弾丸をもって自衛隊兵士のところへ出かけていくだろう。……帝国主義的政策に反対する闘争、兵士と人民の交流を通して軍隊に工作する闘争、それが今日のわれわれの"革命的闘争"である。兵士はいまだ夢らない。兵士の素材は闘争するプロレタリア、人民が自らの権力を樹立するに到るとき、彼らは最も優秀な変革的兵士として、社会主義共和国の軍事的任務につくだろう。

これがわれわれと人民の"軍事的闘争"である」（「世界革命」4月1日号）

▼日向派

「如何にしてプロの武装を組織化するのか、如何にしてプルを暴力的に打倒するプロの軍事を準備

〈八面より続く〉

おれている。

だが、これらの考え方は完全に誤まっている。前者は、日本階級闘争が、革命戦争の物質的諸条件を形成していることを見ず、60年代中期の状態を固定化しているのであり、後者は、階級闘争の変化をみとめつつも、それを革命戦争の開始へと組織する放棄しその結果、革命戦争が直面している問題を理解することが出来ずロシアの社会革命になぞらえて革命戦争派を、戦闘団主義と呼ぶわれの見解であり、これこそ自然ボリシェヴィキだと主張している。だがこの自然ボリシェヴィキは、その綱領的、戦術的組織的内実をみれば、「戦闘団主義」よりもはるかに時代おくれのものでしかない。われわれは、次に諸派の立脚点というべき内容をみることによって、このことを確認しよう。

(d)革命戦争の組織問題と軍事問題

▼革マル派

「前衛党の組織原則（民主集中制）はいかにあるべきか、それと組織構成員の主体性とのかかわりはいかにあるべきか、さらに党内（分派）闘争はどのような条件のもとでいかに組織され展開されるべきか」（解放）

革命戦争は反動的と考えておりそれゆえ、軍事問題には当然にもノーコメントである。

▼革労協

「プロレタリア革命運動の根拠地（党）は、プロレタリア大衆の団結（労働組合―工場）の中に建設されねばならない」

「武装は階級闘争の成熟度合（それは、具体的には、組織としての体現される）を正確にきわめた「現段階武装」以下であっても、以上であってもならない」……銃撃戦や爆弾戦はやってくるかもしれない。しかし、まだがいなく言えることは、現在はその時期ではない。（解放）

▼叛旗

「党、軍、統一戦線を階級的発現の独自性と統合性から押え、綱領、規律、生活倫理においてきたのである」（叛旗）

▼第四インター

「前衛党の組織原則（民主集中制）はいかにあるべきか、それと

〈五面八段へ続く〉

〈二面より続く〉

連合赤軍の銃撃戦―歳清に関するテーゼ

(一) 歳清を不可避の代償として闘わた連合赤軍の銃撃戦を支持する。それは、労働者階級に対して革命戦争の不可避性を示し、革命戦争派に対するあらゆる敵対を打破し、連合赤軍の党的破産を革命的総括の出発点とすることを教えた。歳清と銃撃戦とを切りはなし、歳清を避けるための条件に関してあれこれ主張することは、結局銃撃戦に対する敵対の立場につながり、プルジョア階級の利益に奉仕するものである。

(二) 我々は歳清を代償とせざるをえなかった連合赤軍の党的破産に対し、人民戦争派の大人達の言葉を借りて、この現実を清算しようとしている赤軍派及び日共革命左派の党的解体を断固として批判する。

(三) 我々はプルジョア階級の革命戦争派に対するあらゆる敵対を打破き、連合赤軍の党的破産を革命戦争の破産と考えている日共、革マル、日向派と断固として闘う。

一方、口先では革命戦争を否定しない諸君たちは、この党の目的に関しては、明確な思想は何一つ語られず、せいぜい、戦術問題があれこれと形式化されているにすぎない。彼らは、連合赤軍を、「無党派戦闘団」よばわりする根拠を何ひとつもっていない。プロレタリア革命に対する思想内容に関しては、これらの諸派はプルジョアジーを怖れ日共、革マル、社民に解体されているわけであって、これらの諸派こそ、連合赤軍の方が、より党的である。

×　×　×

歳清された人々に対する個人的感情にもとづく発言は、さけられるべきこと。

全国委員会・蜂火派の言う「革命運動史上最大の汚点」は、いうなれば、①第2インターの裏切りや、②スターリン主義の成立、に関して言うべきであって、今回の事態は、そもそもその様な評価につらぬかれていくか、即自的なプロレタリアを階級的自覚さ世界無政府主義的立場にしてしまっていることである。

日本共産党、スターリン主義に対して、主体性の確立とか、組織の疎外からの解放とか、労働者階級の自立とかいって批判した彼らは、今日では、階級闘争の現実、党、兵士と人民の交流を通して軍隊に工作する闘争、それが今日のわれわれの"革命的闘争"であるとは言えるとは、現在はその時期ではない。（解放）

▼叛旗

「党、軍、統一戦線を階級的発現の独自性と統合性から押え、綱領、規律、生活倫理においてきたのである」（叛旗）

▼第四インター

「われわれは、未だ銃を手にはしないが、紙と言葉の弾丸を、それも大量の弾丸をもって自衛隊兵士のところへ出かけていくだろう。……帝国主義的政策に反対する闘争、兵士と人民の交流を通して軍隊に工作する闘争、それが今日のわれわれの"革命的闘争"である。兵士はいまだ夢らない。兵士の素材は闘争するプロレタリア、人民が自らの権力を樹立するに到るとき、彼らは最も優秀な変革的兵士として、社会主義共和国の軍事的任務につくだろう。

これがわれわれと人民の"軍事的闘争"である」（「世界革命」4月1日号）

▼日向派

「如何にしてプロの武装を組織化するのか、如何にしてプルを暴力的に打倒するプロの軍事を準備

〈五面八段へ続く〉

プルードン主義に転落したうえのくん

（1）党的敗北から党的解体へ向う赤軍派

妙義山中における14名の「脱落者」への、血の粛清を代償にかちとられた、銃撃戦の敗北以降、共産同赤軍派は、党的敗北から更に党的解体にむかっている。このことが現在、種々の指導者達の壊を切ったように行われた「自己批判」―「総括」の洪水の中で、すべての労働者階級の人民の前に、明らかにされなければならない。

「銃撃戦は支持するが、粛清は誤りであった……」「森が悪い……」といった彼らの組織的態度は清算主義そのものであり、我々は党のプロレタリアートに対する責任――中央集権主義の観点からも赤軍派の組織が分権主義であり、個々の指導者たちの組織的態度が彼らの直観的教条（攻防の弁証法（と個人主義にその基礎をもつ）に転落していることを明らかにし、赤軍派の党的解体を指摘しなければならないことを、ここでは、赤軍派の代表的指導者の一人、うえのかっきくんの一連の「総括」の中に含まれているような最低の混乱」として、より具体的に明らかにしていきたい。

（2）「革命の暗黒……」における うえのくんの清算主義

「私は共産主義同盟赤軍派の一員として、連合赤軍のもたらした革命の暗黒について、根源的な自己批判の総括を出すにあたって心あるすべての人々の批判をあおぐ」（1P）からはじまって、29Pに至るほとんど大部分を（6）までに述べたことは実は極めて重大な欠陥をもっている。獄中にいるとはいえ、それはブルジョアジーに対する党派、宣戦布告、それがないことである。（30P）として自己批判し、「よくぞやった森達よ〃連合赤軍は、銃撃戦・大鉄の爆弾同志殺し、という集団半焼身自殺的弱さ、それらすべてをもってこの憎むべき資本主義社会を告発し、宣戦布告をしたのだ」（31P）に至っているこのパンフレットは、末尾3Pの精神をもって、29Pの大部分を書きかえられてから発表されるべきであった。

だが混乱を混乱として発表しているところに、うえのかっきくんの動揺と歴史的警戒心の欠落、赤軍派に共通する組織態度における無原則性――プロレタリアートに対する党的責任の放棄があらわれているのであり、ブルジョアジーが「自己批判文」として宣伝し（読売新聞）、赤色救援会や右翼的に歪曲してかいつまむことを結局、うえのくんのパンフは許している。獄中にいて、うえのくんが鉄盾になっているから、このようなパンフの発表のされ方もやむをえないのかということではない。「自己批判の総括」の真であり、自らの行動は組織の行動であり、プロレタリアートの一（中にある組織のうち）最高の団結形態である党を、例え何があっても守り抜くこと……プロレタリアートの利益を代表する組織＝自分なのだ」（赤報3号定田同志）ということを、共産主義者は、プロレタリアートの党的責任として、一瞬たりとも忘れてはならないのであり、内部清算問題を、「同志殺し」という集団半焼身自殺的弱さ」と、とらえて、「同志愛」に転化して総括したり、「三種の軍隊」から中央第一元主義を批判し、果ては、反革命日共や社会党との統一戦線をうたったりしているうえのくんにおける「共産主義化」論と、大衆路線主義の結合という彼の政治的退化と、「森個人としては、これこれの過去を考えてみるなら、ついていけない者の一時的脱落を許すべきだが、それが出来なかったのは、一元論の金縛りであろう。」森は女性に対する誤った考えをもっていた。男に対しては、女とデカイチャすることはやつは、革命できないといった人類否定的な考え、それに、女性に対しては、彼の周辺で「絶に活動していた××××××（伏字）そういった事を彼が直接したかどうかは別として、彼とワンセットに考えられるものがあっていた」として総括を、指導者個人の資質や人格の問題にスリカエてゆくような、組織態度におけるうえのくんの清算主義論が、このようなパンフの発表の仕方となってあらわれているのである。

我々が、赤報3号塩見批判における、内部清算は銃撃戦の前にあったのであるから粛清と銃撃戦Ⅱ善とする総括は事実に反しており、そのような、総括の仕方は、銃撃戦そのものの革命的意義を洗い流し、結局、銃撃戦への敵対につながり、ブルジョアジーの反攻撃に転化することになる、ということを、他の赤軍派の指導者達と同様、特にうえのくんは知らなければならない。10日間の銃撃戦に結合した一連の内部粛清は、もりくんやその他のくんの知らないところで、階級闘争として、全く清算するに至っているのである。

「右も左も真暗闇」なのは、内部崩壊によって動揺しているうえのくんなのであって、階級闘争ではなく、連合赤軍における、旧来の「軍から党へ」の路線から不断の飛躍による党への発展、その裏返しとしての分権主義、「外部注入」ならぬ「共産主義化論」によって乱脈し、一気に銃撃戦の展開にも引き起こされた事実であり、そこにおいては、「軍から党へ」の組織路線と、うえのくんにも共通する「鉄砲を撃ち個人の共産主義化」論こそが、総括されねばならないのである。

「鉄砲を撃ち個人の共産主義化」論とは、我々が、赤報の号外において明らかにしたように「共産主義社会におけるあるべき規律と関係、男女関係その他を、規律を軸にして形成しようという思想傾向と相まって政治警察との組織戦における後退の結果、生み出された産物であり、うえのくんのパンフにも見られる、「原始共産主義以来の全歴史を総括した豊かな内容で、活動家を教育し直せば、同志殺害、共産主義的なものとして総括できない」という思想傾向と同様の思想的基礎を持っているのである。

にもかかわらず、うえのくんの総括では、「軍から党へ」の組織路線＝「共産主義化論」の必然的帰結として「連合赤軍の崩壊」に対して、まだまだ、「共産主義化」が足りなかったからだという結論になっていないばかりか、一連の崩壊を代償にかちとられた銃撃戦に対しても、「人民裁判」への先鋭に立って来たものが、それ故多くの支持を得、希望がかかりかけられていたにもかかわらず……召還主義的極左冒険主義の武装闘争として悪質なものに転化していた」（17P）と、全く清算するに至っているのである。

「右も左も真暗闇」なのは、内部崩壊によって動揺しているうえのくんなのであって、階級闘争ではなく、連合赤軍における、旧来の「軍から党へ」の組織から不断の飛躍による党への発展、その裏返しとしての分権主義、「外部注入」ならぬ「共産主義化論」によって乱脈し、一気に銃撃戦の展開にも引き起こされた事実であり、そこにおいては、「軍から党へ」の組織路線と、うえのくんにも共通する「鉄砲を撃ち個人の共産主義化」論こそが、総括されねばならないのである。

「鉄砲を撃ち個人の共産主義化」論とは、我々が、赤報の号外において明らかにしたように「共産主義社会におけるあるべき規律と関係、男女関係その他を、規律を軸にして形成しようという思想傾向と相まって政治警察との組織戦における後退の結果、生み出された産物であり、うえのくんのパンフにも見られる、「原始共産主義以来の全歴史を総括した豊かな内容で、活動家を教育し直せば、同志殺害、共産主義的なものとして総括できない」という思想傾向と同様の思想的基礎を持っているのである。

にもかかわらず、うえのくんの総括では、「軍から党へ」の組織路線＝「共産主義化論」の必然的帰結として「連合赤軍の崩壊」に対して、まだまだ、「共産主義化」が足りなかったからだという結論になっていないばかりか、一連の崩壊を代償にかちとられた銃撃戦に対しても、「人民裁判」への先鋭に立って来たものが、それ故多くの支持を得、希望がかかりかけられていたにもかかわらず……召還主義的極左冒険主義の武装闘争として悪質なものに転化していた」（17P）と、全く清算するに至っているのである。

（3）プルードンに乗り移ったうえのくん

うえのくんの資本主義批判は、「三種の軍隊を建設してゆくために」（赤報2号）に詳しい。ここでは、軍建設における一元論＝単純思考、左右の主観主義的総括の「戦闘と生産」と題して、次の様に述べている。ここで重要な点は、「人間労働は自然に働きかけて、自然の質量換を行って、それによって生きている。ところで、私有財産制度のもとでは、たとえば、農業では、自然に働きかけて農民が米をつくると、全く働かず、従って一粒の米さえつくらなかった地主が、そのほとんどを奪い、農民には生かさぬよう殺さぬよう、その程度のものが与えられる。工業では、例えば、一〇〇円の石油から一〇〇〇円のシャツを作り、働かなかったブルジョアは、八〇〇円かまとめて、一〇〇円だけ労働者に与える、といったものの、戦闘と生産を主とした両者の媒介となるもの、この三つの形態、この三元を一つの勢力が持たねばならない。」といった空論はなく、連合赤軍における、旧来の「軍から党へ」の組織から不断の飛躍による党への発展、その裏返しとしての分権主義、「外部注入」ならぬ「共産主義化論」によって乱脈し、一気に銃撃戦の展開にも引き起こされた事実であり、そこにおいては、「軍から党へ」の組織路線と、うえのくんにも共通する「鉄砲を撃ち個人の共産主義化」論こそが、総括されねばならないのである。

「鉄砲を撃ち個人の共産主義化」論とは、我々が、赤報の号外において明らかにしたように「共産主義社会におけるあるべき規律と関係、男女関係その他を、規律を軸にして形成しようという思想傾向と相まって政治警察との組織戦における後退の結果、生み出された産物であり、うえのくんのパンフにも見られる、「原始共産主義以来の全歴史を総括した豊かな内容で、活動家を教育し直せば、同志殺害、共産主義的なものとして総括できない」という思想傾向と同様の思想的基礎を持っているのである。

にもかかわらず、うえのくんの総括では、「軍から党へ」の組織路線＝「共産主義化論」の必然的帰結として「連合赤軍の崩壊」に対して、まだまだ、「共産主義化」が足りなかったからだという結論になっていないばかりか、一連の崩壊を代償にかちとられた銃撃戦に対しても、「人民裁判」への先鋭に立って来たものが、それ故多くの支持を得、希望がかかりかけられていたにもかかわらず……召還主義的極左冒険主義の武装闘争として悪質なものに転化していた」（17P）と、全く清算するに至っているのである。

「右も左も真暗闇」なのは、内部崩壊によって動揺しているうえのくんなのであって、階級闘争では

んの決定的誤りは、次の箇所である。

「工業では、たとえば、一〇〇円の石油から一〇〇円のシャツを作り、働かなかったブルジョアは八〇円かすめとり、一〇〇円だけは労働者に与える、という調子で、働きもしなかった、従って何の価値も生み出さなかったものが、価値を生み出す労働の加えたものから価値をかすめとるといったことが起る。」（ビザ２号 P）うえのくんのこの資本主義批判は空想の産物である。資本家の現実には、実際には次の様になっている。

「任意の一労働者、たとえば織布工をとってみよう。資本家は彼に、機と糸とを提供する。織布工は作業にかかる。そして糸が麻布となる。資本家は亜麻布を吾がものとして、それをたとえば二〇マルクで売る。さて織布工の労賃は、亜麻布の、二〇マルクの、彼の労働の生産物の、分前であろうか？　決して、そうではない。亜麻布が売られるよりずっと前におそくそれが織りあげられるよりもずっと前に、織布工は自分の労賃をうけとっているのである。だから資本家は、この賃金を、亜麻布を売って手に入れる貨幣で支払うのではなく、手もちの貨幣で支払うのである。ブルジョアによって織布工に提供される機と糸とが織布工の生産物でないのと同様に、織布工が自分の商品たる労働力と交換して受ける諸商品も彼の生産物ではない。ブルジョアが自分の労働力を買うのであって、それはあたかも、彼が自分の財産の他の一部分をもって、原料たる糸や労働用具たる機を買ったのと全く同じである。彼が、そうしたことは、織布工には何の係わりもない。資本家は自分の手もとにある財産、自分の資本の一部分をもって織布工

連合赤軍の闘争と資本家階級・知識人・諸党派の対応（下）

我々は前回において、銃撃戦の可能な限りでの事実過程を追いながら、敵階級との非和解的対立―遊撃戦の端緒を切り開いたものとしての、政治の集中した表現である軍事的対決を連合赤軍と政治警察―機動隊との攻防という形で明らかにし、その様な階級闘争の現実が〝幻想〟とか〝まぼろし〟でもなく、また一部の狂信的な変わった考えを持った集団の気ちがいじみた闘争でもないこと、そしてまた階級闘争が革命戦争―遊撃戦として発展しつつある根拠―階級対立の非和解性の経済的基礎が存在することを資本家、政治家の必死の隠蔽策動にもかかわらず明らかにしてきた。

最後に遊撃戦の時代思想、政治内容が共産主義でなければならないことを簡単にふれておいた。

今回は、政治警察の〝共産主義〟取締りの性格と、反スタ諸党派が「連合赤軍の破産＝敗北」として合唱し、階級闘争の現実を見ることが出来ず、従って革命戦争に敵対または対する根を政治警察の攻撃の性格との関係で明らかにしてゆきたい。

（4）政治警察との闘争

(a) 階級闘争の発展と政治警察の攻撃の質的転換

昨年4・28銀行強盗殺人戦争突入と6・17の一発の爆弾の投下はブルジョア権力をして、60年代（とりわけ60年代後半）の色あいのちがいを

〈七面より続く〉

○ひげをはやす　7件
○頭髪を伸ばす　4件
○幼主刈りにするマスクを使用する　3件
○その他　8件

7 捜査力の集中的運用

……指名手配被疑者の捜査換に急転し、反日闘争の展開を困難にするために、特に反日闘争の中心的な担い手である革マル派の活動家に対する尾行・監視を強化し、その行動を逐一把握するとともに、革マル派の組織実態を解明するために、革マル派の組織内部に潜入工作を行なうこと。

8 情報収集活動の強化

……革マル派の組織実態を解明するために、革マル派の組織内部に潜入工作を行なうこと。

9 民衆の協力確保

……革マル派の組織実態を解明するために、革マル派の組織内部に潜入工作を行なうこと。

10 その他

……革マル派の組織実態を解明するために、革マル派の組織内部に潜入工作を行なうこと。

（5）日本共産党の態度

(a) 日共の基本的主張

階級闘争がプロレタリア階級に対するブルジョア階級の革命戦争であるプロレタリア階級の革命闘争を圧殺するために、ブルジョア階級の利益を守っているのである。

日本共産党は、その綱領で、「民主主義革命とひきつづく社会主義革命を経て、日本に社会主義社会を建設する」としている。

この「人民の民主主義革命」は、「労働者と農民の階級同盟を基礎とする人民の政府を樹立することが出来る」（前衛1回大会特別号P一五七）のであるが、「人民の勢力は権力をとるまでにも選挙によって安保数派を形成し、統一戦線政府（同P六九）から、民主連合政府による平和革命をめざすことが、日本共産党の目的であり、そのための選挙運動と党組織の拡大が、日本共産党の戦術となっている。

このような日本共産党の、思想、戦術、組織は、階級闘争に対するマルクス主義の原則の放棄であり、帝国主義者に対する屈服と追随であり、労働組合の団結によって獲得されたプロレタリアの小市民的生活条件と基礎をおく反動的な内実である。

第一に両階級の非和解的対立を否定し、労働者が生きのびるためには資本家の財産をふやすために彼らの指揮の下で働く限りにおいてであり、彼らの賃金、雇用、搾取の増大、さらに政治的、経済的な抑圧、隷属の強化、といった生活状態は、生産手段を独占している資本家と地主に労働者がますますプロレタリアートの階級的利益にそむいてゆくことを期待してのその党が、議会政治としてまた日本共産党の当の姿をよく知っており、そのような幻想をふりまいていることに根拠がある。

「日本共産党は合法政党であり、いっぱいな党だと言えている。」（佐藤栄作、3月16日衆院本会議）、林百郎（日共）の質問の答弁、3・17読売）

佐藤栄作は、このような外交辞礼でもって答えているが、一方、連合赤軍＝日共、リンチの本家＝宮本顕治にいった宣伝をも行い、日共にゆさぶりをかけている。要するに、ブルジョアジーは、日共が、連合赤軍のような闘争を闘われると困るのであって、だから連合赤軍の闘いが二度とおこらないように、これらの宣伝を行っているのである。にもかかわらず、日共は、このブルジョアジーの攻撃を逆転させ、民主主義的要求の実現がプロレタリア独裁をもたらすかの如く考えることによって資本主義を護持している。すなわち、労働者が資本家に経済的に隷属している条件＝資本主義社会での政治的自由は、ブルジョア階級にとっての自由を意味するにすぎず、プロレタリア階級の闘争に対する抑圧でしかないこと、それゆえ、プロレタリアートは、闘いとった政治的自由を、自らの経済的隷属を断ち切るために利用しない限り、自らの自由を実現出来ないことを否定し、資本主義との闘争を回避しているのである。

第四に、だから日本共産党が要求しているのは、資本主義の打倒ではなくて、そのもとでの生活の向上でしかなく、それゆえそれはプロレタリアートの代表ではなく、小市民の代表なのであり、階級闘争の激化に対し、自分のさまざまな地位を守る反革命分子の代表である。

(b) 国家権力に取締りを要求する社会帝国主義

ブルジョア階級は、日本共産党の当の姿をよく知っており、そのような幻想をふりまいていることに根拠がある。

「日本共産党は合法政党であり、いっぱいな党だと言えている。」（佐藤栄作、3月16日衆院本会議、林百郎（日共）の質問の答弁、3・17読売）

佐藤栄作は、このような外交辞礼でもって答えているが、一方、連合赤軍＝日共、リンチの本家＝宮本顕治にいった宣伝をも行い、日共にゆさぶりをかけている。要するに、ブルジョアジーは、日共が、連合赤軍のような闘争を闘われると困るのであって、だから連合赤軍の闘いが二度とおこらないように、これらの宣伝を行っているのである。にもかかわらず、日共は、このブルジョアジーの攻撃を逆転させ、民主主義的要求の実現がプロレタリア独裁をもたらすかの如く考えることによって資本主義を護持している。すなわち、労働者が資本家に経済的に隷属している条件＝資本主義社会での政治的自由は、ブルジョア階級にとっての自由を意味するにすぎず、プロレタリア階級の闘争に対する抑圧でしかないこと、それゆえ、プロレタリアートは、闘いとった政治的自由を、自らの経済的隷属を断ち切るために利用しない限り、自らの自由を実現出来ないことを否定し、資本主義との闘争を回避しているのである。

第四に、だから日本共産党が要求しているのは、資本主義の打倒ではなくて、そのもとでの生活の向上でしかなく、それゆえそれはプロレタリアートの代表ではなく、小市民の代表なのであり、階級闘争の激化に対し、自分のさまざまな地位を守る反革命分子の代表である。

(b) 国家権力に取締りを要求する社会帝国主義

ブルジョア階級は、日本共産党の当の姿をよく知っており、そのような幻想をふりまいていることに根拠がある。

「日本共産党は合法政党であり、いっぱいな党だと言えている。」（佐藤栄作、3月16日衆院本会議、林百郎（日共）の質問の答弁、3・17読売）

佐藤栄作は、このような外交辞礼でもって答えているが、一方、連合赤軍＝日共、リンチの本家＝宮本顕治にいった宣伝をも行い、日共にゆさぶりをかけている。要するに、ブルジョアジーは、日共が、連合赤軍のような闘争を闘われると困るのであって、だから連合赤軍の闘いが二度とおこらないように、これらの宣伝を行っているのである。にもかかわらず、日共は、このブルジョアジーの攻撃を逆転させ、民主主義的要求の実現がプロレタリア独裁をもたらすかの如く考えることによって資本主義を護持している。すなわち、労働者が資本家に経済的に隷属している条件＝資本主義社会での政治的自由は、ブルジョア階級にとっての自由を意味するにすぎず、プロレタリア階級の闘争に対する抑圧でしかないこと、それゆえ、プロレタリアートは、闘いとった政治的自由を、自らの経済的隷属を断ち切るために利用しない限り、自らの自由を実現出来ないことを否定し、資本主義との闘争を回避しているのである。

第四に、だから日本共産党が要求しているのは、資本主義の打倒ではなくて、そのもとでの生活の向上でしかなく、それゆえそれはプロレタリアートの代表ではなく、小市民の代表なのであり、階級闘争の激化に対し、自分のさまざまな地位を守る反革命分子の代表である。

第一に、民主主義革命と社会主義革命とを区別し、民主主義革命の段階で、プロレタリアートの階級的利益にそむいてゆくことを期待している。

第二に、党の目的は、労働者階級の経済的解放であり、あらゆる政治運動は手段としてこの目的に従属すべきものであること、政治権力の獲得はプロレタリアートの偉大な義務であること、（第一インター一般規約）という所謂闘争に対するマルクス主義の原則は完全に投げすてられ、選挙による民主連合政府の樹立、それによる民主主義革命が党の目的とされてしまっている。

第三に、民主主義とはブルジョア独裁であることを否定し、民主主義的要求は、プロレタリア独裁の要求に従属したものであることを忘れ去り、プロレタリアートの階級的闘争を闘わないことを意味すること